

弥生の生活を体験！

縄をなう

年が明けて1カ月が過ぎましたが、お正月の飾りとして注連飾りがあります。

縄は、通常は右縄でなわれます。わらを両手で挟み、右手を手前から押し出すようにしてよりをかけることで、2本のわらがねじれ合って右縄になります。

弥生から時を超えて

青谷上寺地遺跡

ところが、注連縄は、通常の右縄と違い、左縄でないです。右利きの人にとっては、右手に力が入る右縄の方が比較的簡単に、強い縄ができあがりません。左縄は手の動きが逆になるので、簡単にはいきません。

ところで、古代の人はどう縄をなっていたのでしょうか。縄文時代には、名前の由来ともなっている縄目文様の、この時代独特の土器があります。この土器の模様を観察すると、右縄と左

縄の両方が確認できます。

青谷上寺地遺跡では、これまでに10本程度の縄の破片が出土されていますが、そのほとんどが左縄です。なぜ左縄なのでしょう。このことから察すると、弥生時代には左利きの人が多かったのでしょうか。

また通常の縄は右縄、注連飾りは左縄という使い分けは、いつごろからするようになったのでしょうか。縄一つをとっても、古代への興味がつきません。

※考古学では、左よりを右縄、右よりを左縄と分類しています。



因幡万葉 夢幻譚

現代から万葉の世界へ旅をする私こと「万葉の旅人」が大伴家持と語り合う夢物語

最終章 卷十一 清らかな家の名

天平宝字六年（七六二）旧暦一月九日。いよいよ大伴家持に中務大輔の辞令が下った。

「まもなくお別れですね」と私が大伴家持さんに声を掛ければ、「四年前の正月初子の日、孝謙女帝が玉箒を臣下に与えて酒宴を催したことがある。その玉を散りばめた箒は、手に取るとすぐ、新春の生命力を撒き散らすようで、これほどめでたいことはないと思っただのだ」と懐かしげにいう。

「※奈良麻呂の変のとき、何故中立を保たれたのでしょうか」と、唐突ではあったが、私は最も聞きたかった核心に迫った。「どうしても申すか」と家持さんが低い声で念を押す。

そうして家持さんは覚悟を決めたのか、「斜陽する大伴氏にあって、私は父旅人に家を持てと名付けられた。このとき遙か神話時代から天皇の傍らで華々しく奉仕してきた、その伝統を伝える大伴氏宗家嫡流の宿命を背負ったのだ。陰謀渦巻く奈良朝の政界を生き抜くためには、個人的な感情を棄てねばならぬ。永い時間のなかで培った清らかな家の名を逆賊の汚名

に貶めてはならぬという思いだけだった」と一気に閉じ込めた思いを吐き出した。

「この因幡の地へは、重い宿命を背負って来られたのですね」と私が問えば、「私は主を失い、この地へは傷心のうちに赴いてきたのだった。しかし、今となってはその使命感が私の生きる強さとなったのだ。私は、一時の華を求めず、菅の根のように大伴の名を伝えていく。因幡で過ごした三年半、当地の豊かな自然に抱かれ、やさしい人々と出会う中で得心したので」と言った家持さんの清々しい眼差しが印象的だった。

——終——
ご愛読、ありがとうございました。

万葉クイズ
(先回の問題) 現在の新嘗祭の日は何の日?
(解答) 勤労感謝の日

※奈良麻呂の変
孝謙天皇の御世、時の宰相藤原仲麻呂に対して、故左大臣橘諸兄の息子奈良麻呂は、皇族や大伴・佐伯氏らとクーデターを謀るが失敗。大伴氏最大の危機に中立を保った家持だったが、結果的に一族の主だった者を失い、因幡の国へ左遷されるきっかけとなった。



©鈴木靖将